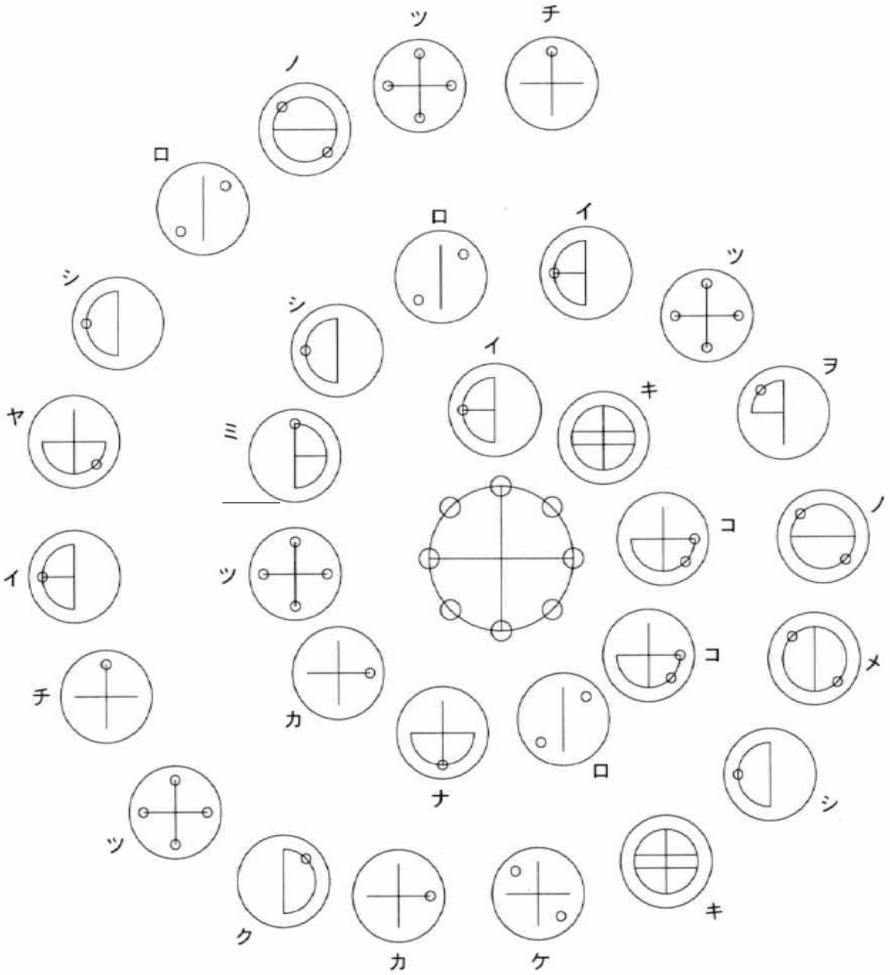
第五十六首



オホナホビメ
イキココロ
カムミイヤマヒ
カムミソギ
ウルハシココロ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

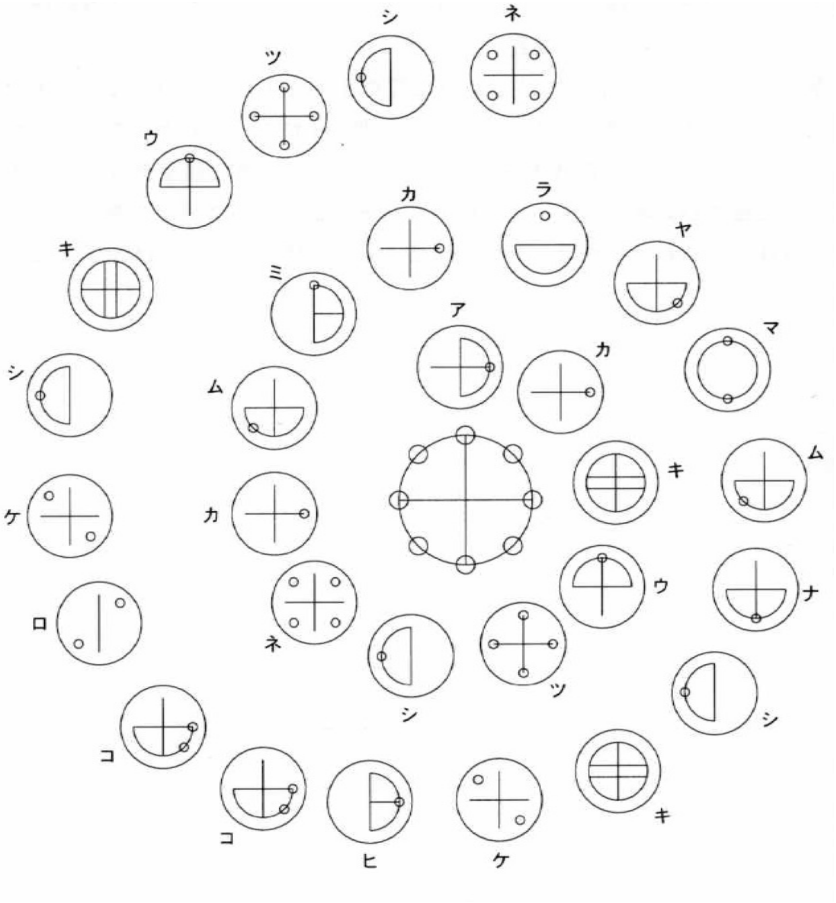
・第五十六首解説

オ（六方環境に存在し）ホ（親和重合のフトマニのチカラの）ナ（反復）ホ（親和重合の）ビ（根源のチカラを）メ（発生のメとしてヒメている）イ（電気粒子の）キ（発生のココロ（繰り返し繰り返し正反にオクからあらわれる粒子）
「オホナホヒメ　イキココロ」とは、六方環境に存在する大きなカムのチカラが我々の生命体のイキココロ」という意味になる。
「カムミ」は、潜象の大きなチカラの実体・現在科学が未発見の潜象の極微粒子の意味になる。
「イヤマヒ」は、イ（電気粒子）がヤ（飽和安定状態）まで変遷進行してマのヒになったという意味。「イヤマヒ」は「敬い」の意味になり、「ヤマヒ」は「病」の感じがあてがわれるが、「イヤマヒ」に病気の意味はない。イがヤまで進行せず飽和安定までいかないと病になった」というところから病気を治すのが「ヤマヒ」のチカラであったが、それが後に「病気」の意味になってしまったのだと考えられる。
カムミ（カムのミ）をソギ（ソに発生・粒子化して発生を繰り返す）すれば、イキココロがウルハシ（潜象のオクから発生し存在し正反に示される）の波動量を持つココロ（生物脳のアマナ）となる。

ミソギ：（カタカムナ人の思念としては）何をするにもミ（カムのミ）を入れて生きること、「ミをいれる」「ミコト」など「ミ」に示された想いを感じる。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第五十七首



アカキウツシネ
カムミカラヤマ
ムナシキ　ケヒココロ
ケシキウツシネ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第五十七首解説

ア（現象にあらわれている）カとしてキ（発生した）ウ（潜象界面から）ツ（個々の粒子として）シ（示された）ネ（根源の根）は、カム（潜象の）ミのカがラ（あらわれて）ヤマ（極限飽和するまでいっぱいに詰まった状態になったもので）ム（六方粒子化の）ナ（反復の）シ（示しの）キ（発生の）ケヒ（変化性を持つ根源の）コ（反復発生の）コロ（微粒子として）ケ（変化性を）シ（示して）キ（発生する）ウツシネ（潜象界面から個々粒子として示された根源のネ）となるのである。

「アカ」には「あきらかにあらわれるカ」という意味があり、「アカキウツシネ」とは、アカの状態において発生したウツシネ」。「ウツシ」は「写し、映し、移し、還し、現し、顕し」など、伝達、遺伝の漢字が当てられている。
カタカムナの中では、「アマウツシ　カムウツシ　ウツシマツルウツシキカナ　アメノウヅメ　アメノウツシ　ウツシタマ　ウツシホギ　ウツシヨミ」などと使われている。

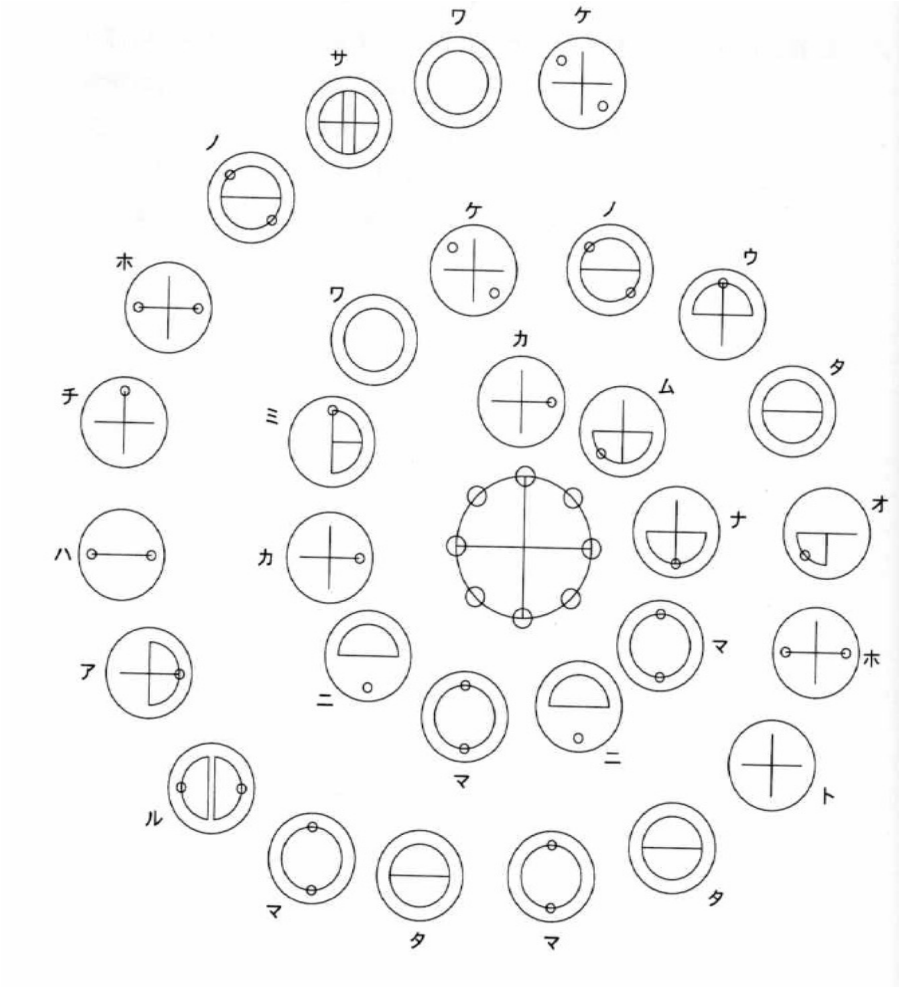
「ヤマ」とは、ヤのマになった、「なんでも極限飽和になるまでいっぱいにつまった状態」をあらわしている。
「宝の山　山盛り　山分け　事件の山」など、上古代人の思念が受け継がれている。

「ムナシキ」は現代用語では、「虚しき」「空しき」などが浮かぶが、カタカムナでは六方の立体に反復して示され発生するという意味になり、純粋に潜象粒子の発生、変遷の物理を示すコトバとして使われている。

この首では、潜象のカのヒが現象界において六方より立体化していく状態をあらわしている。精子と卵子の結合において新しい生命が誕生する。それは宇宙や地球、あらゆる現象物の発生、変遷、還元の物理と相似なのである。受け継がれていく、それも遺伝子、DNAの情報（ヒ）が変化、変遷しながら（ケヒ・ケシキ）受け継がれていく（ウツシネ）ことの相似。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第五十八首



カムナマニマニ
カミワケノウタ
オホトタマ
タマルアハチ
ホノサワケ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第五十八首解説

カムナ（カムの名代）が、マニ（マに定着され）マニ（マに定着されて）カミワケ（カのミがワから変遷性を以って発生し）ノ（多様に変遷して）ウタ（潜象界から独立的に出たもの）は、オ（六方環境の）ホ（親和）ト（重合する）タマ（として）タマル（凝結し）（ミツゴマリの凝結したアマナをもつタマとして存在し）ア（現象粒子の）ハ（正反性を）チ（持続して）ホ（正反親和）ノ（変遷の）サ（カの量なりに）ワケ（られたものである）

４８首から５７首をうけて
「アマツカミのカムナがウタしてサトシ」されたものが、「ヤクサスヘヒトのココロとしてワクミト」となり、「メクルモコロオキミツゴ」から「イキココロ」（生物脳のアマナ）になり、「アハキマハラ」（現象の正反の正反＝トキ・トコロ）として発現し、万物万象の示し（ウツラヒノウシ）となり、様々に大きな脳を開発（タマキソラ）「ヘツナギサヒコ　ヘツカカヒヘラ」となり、「ケカクツチ」「イヤシロノツチ」と進行し、「ウルハシココロ」となる。そして、「アカキウツシネ」は「カムミのカラヤマ」であり、「ムナシキ　ケヒココロ」として「ケシキウツシネ」になるという物理（カナムマニマニ　ウタサトシ＝４８首）が、「カムナマニマニ　カミワケノウタ」であり「オホトタマタマルアハチ　ホノサワケ」であるといっている。

「アマツカミ」が全ての「ヒト」のあらゆる生命現象を発生し持続させる「イキココロ」の「ミト」（ミナモト）であり、カムから「カミワケ」されたなりの「カムミ」を自分の「イキココロ」として、「ハクミ」「イヤマヒ」「ミソギ」して「ケカクツチ」「イヤシロノツチ」「ウルハシココロ」と進行する。「アカキウツシネ」「ケシキウツシネ」として「ヒトリ」の生命を全うすることが「ヒト」として最も正常（アタリマエ）なマノスベの生き方であり、それが「オホトタマ」の「タマルアハチ」の「ホノサワケ」のスガタであるというサトリである。

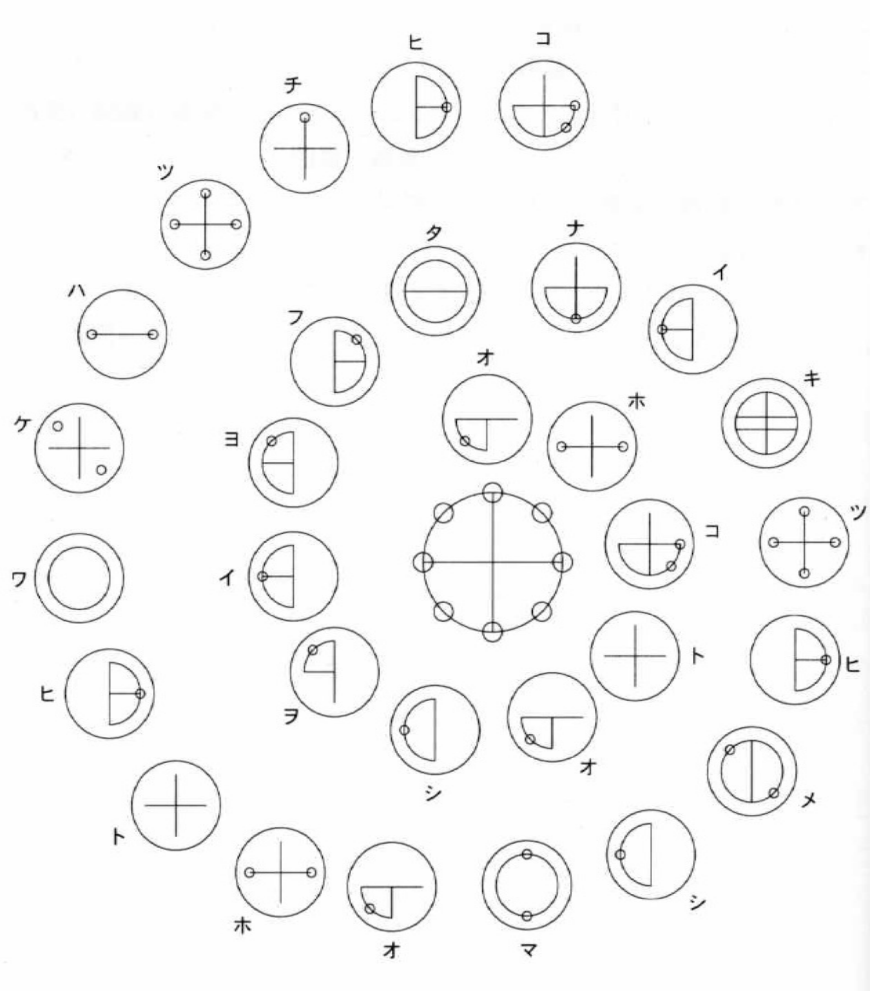
カタカムナ人は現代のような「人間脳」に偏重した生き方は考えられぬもので、彼らはまず、生まれた子の「生物脳」（アワ）を開発鍛錬、蓄積することから始まり、その方向性に沿って「人間脳」（サヌキ）を開発、鍛錬し、「ミチノナカチハ」「ヘツナギサヒコ」「ヘツカヒヘラ」と正反をもって

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

カタカムナ人は現代のような「人間脳」に偏重した生き方は考えられぬもので、彼らはまず、生まれた子の「生物脳」（アワ）を開発鍛錬、蓄積することから始まり、その方向性に沿って「人間脳」（サヌキ）を開発、鍛錬し、「ミチノナカチハ」「ヘツナギサヒコ」「ヘツカヒヘラ」と正反をもって自由に開発し鍛錬し（クミアシハラ）蓄積して「イヤシロノツチ」「ウルハシココロ」「ケシキウツシネ」と進行する生き方しか考えられなかったのだと思われる。それがカタカムナの文明の世を上古代期におのずから（クシサリ）つくり上げることになったのである。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第五十九首



オホコトオシヲ
イヨフタナ
イキツヒメシマ
オホトヒワケ
ハツチヒコ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第五十九首解説

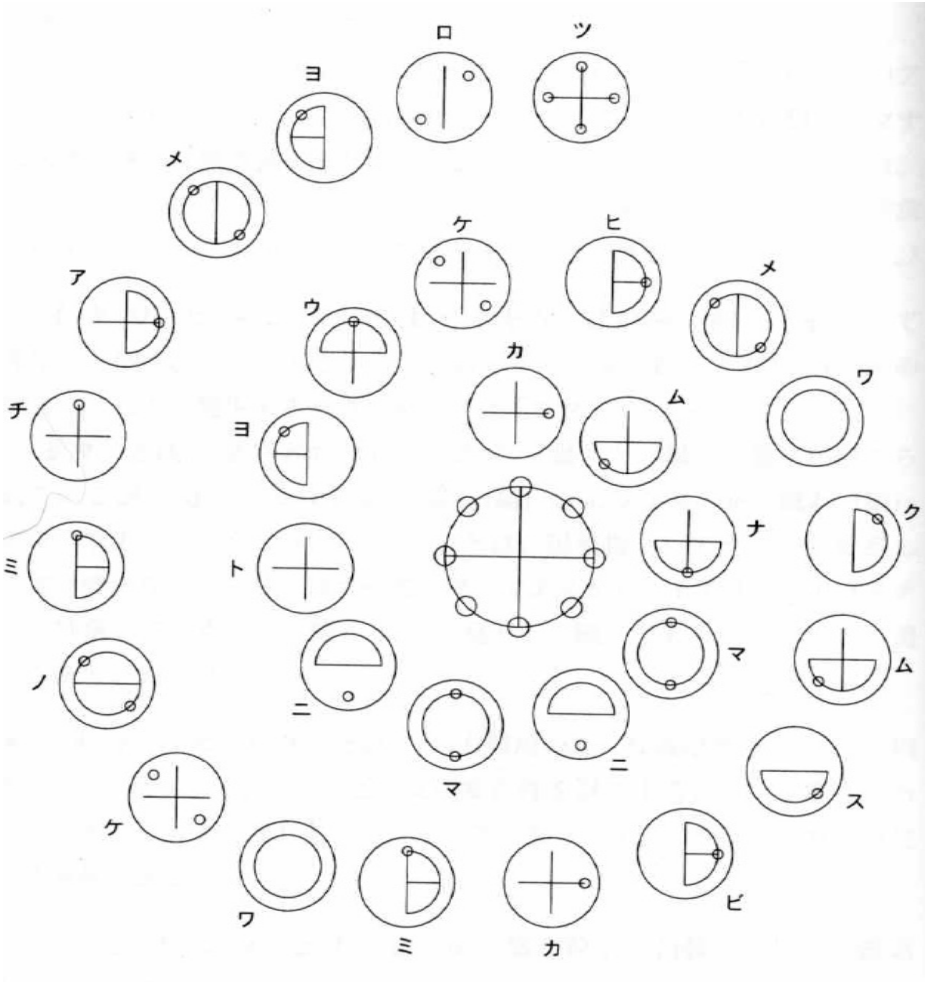
オ（六方環境の）ホ（親和の）コ（反復）ト（重合によって）オ（六方環境から）シ（示されて）ヲ（四相性を以って発生し）イ（電気粒子の）ヨ（四相をもつ）フタナ（二つの独立発生を繰り返すもの）は、イキツ（イとして発生する個々粒子＝オホコトオシヲのイヨフタナ）のヒのメをヒメたシマ（示されたマ）としてオ（六方環境の）ホ（親和）ト（重合の）「ヒ」からワケ（られて）ハ（正反をもつ）ツ（個々粒子を）チ（持続的に発生する）ヒコとなるのである。

１４首に「オホコトオシヲ　イハツチヒコ　イハスヒメ　オホトヒワケ　アメノフキヲ　オホヤヒコ　カサケツワケノ　オシヲオホワタツミ　ハヤアキツヒコ　イモハヤアキツヒメ」とあり
３４首には「アマツミソラノ　アメヒトツハシラ　サドオホヤマト　イヤシロチ　タニキビコ　アキツノイヤシロスベ　シマカサネ　オホタマルワケ　オホコトオシヲ　トワチカ　フタヤヒメ」とあり、５９首は、１４首、３４首のウタを要約している。

「イ」は潜象の「カ」の変遷物であり、カハがフトマニを繰り返して「ヒ」のマリとなり、「フ」「ミ」と変遷してミツゴの状態での何兆回もの旋転循環の凝集を繰り返すことにより、様々な段階の「イ」（電気粒子）の種類が発生するのである。
それは現代科学でいう陽子、中性子、核子、素粒子、クォーク等として捉えられているものであるが、カタカムナ人は、「イ」の電気的な働きは「カムミ」「カムツミ」の「ミ」の行いであり、イノチのイのミが、生物脳のアマナに入ることによって発動されるといっている。生物脳のアマナに入る過程は無意識のうちになされるから、現代人がとらえるのが難しい所以である。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第六十首



カムナマニマニ
トヨウケヒメ
ワクムスビ
カミワケノミチ
アメヨロツ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第六十首解説

カムナがマニマニ（マに現象として「ニ」に何回も定着され）ト（重合の）ヨ（四相を以って）ウ（潜象界面から）ケ（正反に変化性を以って発生する）ヒのメをヒメて、ワからク（自由に）ムスビ（発現して）カミからワケられてノ（変遷する）ミ（実体）のチ（持続が）アメ（現象に発生した）のヨ（四相を以って）ロ（あらわれる）ツ（個々の粒子）となるのである。

４８首「アマツカミ　カムナマニマニ　ウタサトシ」と、５８首「カムナマニマニ　カミワケノウタ」を受けて６０首では「カムナマニマニ　トヨウケヒメ　ワクムスビ」といっている。そしてそれが、「カミワケノミチ」の「アメヨロツ」であるといっている。

「トヨウケヒメ」は４８首から５７首まで「サトシ」されたことをこめて「トヨウケヒメ」としている。カムのチカラをワケられた四相をもってワクをムスんで発生しているので、その思念から「トヨ」が「豊か」の意味になったと考えられる。

「アメヨロツ」は、宇宙の万物万象は「アメ」の変遷した「ヨロツ」であるという思念。

カタカムナ人は全ての現象物を「アメ　ヨロツ」といい、それは「カムナがマニマニ　トヨをウケて　ヒメてワクをムスんで　カミからワケられたミの持続（チ）したものである」と明確に直感していたのであろう。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.